

## 幼稚園における「森にいる空想上の存在」が幼児に果たす役割

渡 邊 拓 真<sup>1</sup>

### The Role of An Imaginary Being for the Forest in Kindergartens

Takuma WATANABE<sup>1</sup>

**Abstract:** The purpose of this study was to show how the role played by an imaginary being from the forest (named “Gory”) was described in kindergartens with forest themes. We examined how five-year-old kindergarteners responded after meeting Gory, as impersonated by an adult. We noted that Gory, an imaginary being from the forest, assumed the following four roles for children: a) By seeing Gory in real life, he became a close companion to the children, allowing their own thoughts to be projected in various ways and for children to freely create narratives about him. Through his presence, Gory encouraged children not only to explore reality, but also to be imaginative while thinking about him. b) Gory represented the intersection between reality and the imaginary world surrounding children, encouraging them to think logically. c) The image children formed from meeting Gory and the feeling of “our Gory” generated from these encounters made Gory a symbol of something for kindergarteners and could help young children to recall symbolic and concrete common images. d) By creating an image of Gory as a presence that gives a sense of security, the anxiety that young children felt toward the natural environment, such as forests, was reduced and a sense of security was instilled in them.

**Keywords:** five-year-old children, forest, imaginary existence, imagination, reality and imagination

#### I 問題と目的

本研究がフィールドとする幼稚園（以下、A幼稚園とする）は、園舎の裏手に山が存在し、園庭から地続きで森に入ることができる。幼児は日常的にその森へ出かけることができ、自由に遊んで過ごす。そのような環境にあるA幼稚園には、いくつかの「森にいる空想上の存在」が語り継がれる。例えば、ゴリーと呼ばれる空想上の生物は、A幼稚園で例年実施されるお泊まり保育<sup>註1)</sup>の活動で、幼児が一人で夜の森を探検する「暗闇探検」で出会うことになる生物だ。このゴリーの誕生は、A幼稚園に勤務していた当時の保育者らによるものであり、現

在も森にいる空想上の生物として存在する。その他にも、森には魔女が住んでいると言われている。魔女は、当時A幼稚園に在籍した幼児が森で遊んでいた際に、魔女の話をしたことを保育者が取り上げて物語が作られ「森に住む魔女」という空想上の存在ができあがったという。

これらゴリーや魔女のように、A幼稚園では幼児と保育者によって空想上の存在が作り出され、それらが現在にも伝承的に語り継がれている。このような空想上の存在は、幼児が森の中で現実の世界を生きながら、一方で空想の世界に身を置き空想に耽ることができるよう、保育者がきっかけを与えたものである。A幼稚園に長年勤めた保育者は「森が空想を引き立てる」と話しており、空想上の存在を創り上げた当時のA幼稚園の保育者らは、森の中で幼児が豊

1 広島大学附属幼稚園

かに空想を膨らませ、それにより一人一人が自分なりの意味づけをすることに価値を置いていたと考えられる。

幼児が空想世界を味わう遊びの一つとして「想像的探検遊び」が知られる。藤野<sup>1)</sup>は、想像的探検遊びとは、保育者が子どもに内緒で架空の想像物の実現可能性を示唆する仕掛けを用意し、探検に対する興味や推論の楽しさを喚起しながら、保育者自身も子どもと同じ立場でその過程を共有する形態をとる遊びと説明している。この遊びは、幼児同士や、幼児と保育者によって作り出される空想世界を扱っている。富田<sup>2)</sup>は空想世界について、身近な現実の世界に存在する物や事柄に対して、新鮮で独特な意味を与えてくれるものとし、子どもが空想の視点でそれを見つめ、様々な感情を喚起させることで、それらは現実とは異なる意味を帯びて子ども自身に迫ってくると述べる。また河崎<sup>3)</sup>も、想像的探検遊びは、科学的世界観形成の感情的な土台を培うと評価し、幼児が遊びの中で空想や想像を用いることに対して意味づけや価値づけをしている。

A 幼稚園では、お泊り保育直前には想像的探検遊びに類する、保育者が幼児に空想上の存在であるゴーリーの実在可能性を示唆するような仕掛けを用意し、ゴーリーに対する興味や推論の楽しさを喚起したり、幼児がゴーリーに思いを馳せたりすることができるよう演出している。この体験は、幼児の園生活を生き生きとした一層深みのあるものにすることができる<sup>4)</sup>と考えられ、現在も A 幼稚園で伝承的に実践されている。

幼児の環境教育に視点をあてると、北欧を中心として世界で実施される「森のムッレ教室」においても、空想上の存在を用いた実践が行われている。森のムッレ教室では、プログラムの中に森に住む「妖精ムッレ」が登場し、森の中の楽しさや自然の循環などの話を通して自然との付き合い方を学ぶという。5、6歳の想像力の豊かな時期に、ムッレという妖精が効果的に登場することにより、この教室で得た知識や体験が深く印象付けられると述べられている<sup>5)</sup>。

一方で、暗闇探検の活動や森のムッレ教室のような、保育者が意図的にその存在を幼児に意識させる特定場面だけではなく、A 幼稚園では日常的な園生活や遊びの場面において、会話の中にゴーリーや魔女などの空想上の存在が度々登場する。暗闇探検ではゴーリーは保育者に

よって意味付けされた存在として登場するが、園生活の場面では、幼児によって保育者の意図とは関係のない、異なる意味を付与されていることがある。幼児が森にいる空想上の存在を發展させて空想したり、森にいる空想上の存在について他者と語り合い探求したりする姿から、空想上の存在が幼児らにより保育者の意図を超えて園生活に取り入れられていることが窺える。想像的探検遊びの実践<sup>6) 7)</sup>からは、想像的探検遊びを通して幼児が空想世界を作り出すことには意味がある<sup>8)</sup>と報告されているが、空想上の存在が、特定の活動にとどまらず幼児の日常生活において、どのような役割をもつのかに焦点を当てた研究は少ない。

そこで本研究では、A 幼稚園の森にいる空想上の存在であるゴーリーと対面を果たした後、幼児が園生活の中で空想上の存在をどのように扱っているのかを検討し、森にいる空想上の存在が幼児に果たす役割を示すことを目的とする。ゴーリーを巡る体験が幼児の生活や活動に与える影響を検討した大野ら<sup>9)</sup>の研究では、ゴーリーと対面した後の幼児がゴーリーをどのように受け止めているのか、インタビューを実施して検討している。その中で、幼児らはゴーリーと対面した自分の体験を咀嚼して自分なりの意味づけを行い、ゴーリーを自らの描く物語へと紡いでいたと述べられている。幼児が自由に空想上の存在を扱う様相が示されているが、大野らの研究はインタビューから得られたエピソードをもとに検討した結果であるため、現実と空想の世界を行き来すると言われる幼児がゴーリーとの対面を経て園生活で空想上の存在をどのように扱うのか、また空想上の存在がもつ役割とは何なのかを検討し理解する必要があるだろう。それは幼児の空想世界の価値を明らかにするための一助となると考える。

## II 研究方法

### a) 対象児

広島県内 A 幼稚園に在籍する 5 歳児クラス 23 名。

### b) 観察期間と手続き

幼児が暗闇探検の活動でゴーリーと対面した翌日の 2021 年 11 月 18 日から卒園前日の 2022 年 3 月 16 日までの期間において、午前中（9 時から 11 時 30 分）の自由保育時間及びクラス全員で森へ出かけるなどして過ごした際の様子を担当保育者である筆者が観察し、幼児の発話にゴー

リーが登場した場面を手書きメモにて記録し、その後事例として書き起こした。筆者が書き起こした事例から、幼児が森にいる空想上の存在を扱っていると捉えられる場面を整理した結果、15事例が抽出された。その後、抽出された事例に対して、森にいる空想上の存在が幼児に対して果たす役割を検討した。保育研究を行う大学教員と保育経験のある大学教員5名に対して、事例の解釈への恣意性の排除、分類と命名の妥当性について意見を求め、合議によって分類・命名を決定した。

### c) 倫理的配慮

本研究全般にわたり、個人情報保護を含めて保護者の了承を得た。また事例は匿名化した。

### d) 「森にいる空想上の存在」とは

本研究では、A 幼稚園で行われる暗闇探検の活動において幼児が実際に出会ったゴーリーを「森にいる空想上の存在」とした。前節で概要を記したが、このゴーリーの詳細を説明する。ゴーリーとは保育者が創作したA 幼稚園の森にいる空想上の生物である。例年9月に実施されるお泊まり保育（観察期間とした2021年は11月17日に宿泊せずに開催）にて、幼児らが夜の森へ出かける暗闇探検が行われる。お泊まり保育の数日前、ゴーリーから幼児らに宛てた手紙が届き、お泊まり保育の日の夜に森で待っていること、一人で会いに来ること、友達になりたいことなどの内容が書かれている。暗闇探検では、幼児が一人でゴーリーと対面する機会（ゴーリーの着ぐるみを着た学生が、森の所定の場所に控えている）が、保育者によって設定される。幼児がゴーリーと対面した後は、友達になった証としてゴーリーから首飾りを手渡される。

現在のA 幼稚園の保育者は、幼児がゴーリーと対面することによって恐怖と対峙し、勇気をもって立ち向かう教育的な機会として位置付けている。そのため、お泊まり保育の直前には、保育者が幼児に対してゴーリーとの出合いを意識することができるよう、前述したような意図的な仕掛けを行う。しかし一方で、暗闇探検に関連しない日常的な園生活場面では、保育者から幼児らに対してゴーリーの存在を意識するよう、意図的に働きかけることはほほない。そのため日常的な場面では、森にいる空想上の存在であるゴーリーは保育者でなく幼児らによって扱われる。

## Ⅲ 結果と考察

森で過ごす幼児を観察した結果、森にいる空想上の存在を扱っていると捉えられた場面が15事例あった。収集された事例の中で、森にいる空想上の存在を扱った幼児数は、在籍数23人中15人（65.2%）であった。収集された事例について、森にいる空想上の存在が幼児に対して果たす役割を検討した結果、表1の4つに分類された。なお事例は記載順に番号を付与した。

以下に、観察によって収集された事例の解釈をもとに考察を行い、森にいる空想上の存在が幼児に対して果たす役割を4つに分類した理由を記す。

### a) 幼児の思いが投影させられ、自由に語りを作り出させる役割

#### 【事例と解釈】

#### 事例1 「ゴーリーのプレゼント」

（事例NO.6 3月16日）

卒園式前日、幼児らの希望でクラス全員が森の山頂広場を訪れる。山頂広場にある大きな木の一本の枝に、紐でシダの葉が結びつけてあることに幼児らが気づき、その周りに数人が集まる。ハルトは吊されたシダの葉を掴みながら「これ、なに？」と呟く。続けてシンヤが「こんなの、無かったよね」と、葉を触りながら話す。シンジが「ゴーリーのかな？」と言うと、ハルトははっとした表情で「ゴーリーがやったんだ。ゴーリーのプレゼントだ！」と興奮した様子で話し出す<sup>1</sup>。カナタは「でも、誰か先生が付けたんじゃない？」と言うが、ハルトは「ゴーリーが『年長組さん、卒園おめでとう』って付けてくれたんだ！」と大きな声で言う<sup>2</sup>。カナタは黙ってハルトの話の聞いている。シンジは「そうかも！」と、ハルトの言葉に賛同する。ハルトは「ありがとって、言おう。せーの……」と声をかけると、森に向かってシンジ、シンヤと声を合わせて「ありがとー！」と叫ぶ。

卒園式を翌日に控えた園生活最後の日、森の探検へ行きたいという幼児らの声から、皆で山頂広場へ登った。そこで見つけたものが、木の枝に吊るされたシダの葉であった。幼児らが見つけたシダの葉は、実際は他クラスが山頂広場で過ごした際に保育者が設置したものであった。しかしハルトは、シダの葉が卒園を祝うゴーリーからのプレゼントと解釈した（下線部1）。ハルトの中にある卒園を誇らしく思う心情が、ゴーリーという空想上の存在を通して表出した（下線部2）。ゴーリーによってハルトの思いが投影させられ、卒園を祝うという物語を作り出

表1 森にいる空想上の存在が幼児に対して果たす役割の分類

森にいる空想上の存在が果たす役割	NO	事例名 日付	事例の概要	事例数
a) 幼児の思いが投影させられ、自由に語りを作り出させる役割	1	小さいゴリーー 11月19日	マイコは森にある自分たちの家でままごと遊びをしており、木に絡まった蔦に気付き「階段みたい」と表現する。マイコは「小さいゴリーーがこの階段を登って上まで行くんだ」「ゴリーーがトントんって登って、森の中に入って行ったのかなあ」と言う。	6
	2	ゴリーーの遊び場 1月12日	リョウマ、ヨウコ、カスミは遊びを探しながら森へ入る。木に蔓が絡み付き大きく弛んでいる光景をみたリョウマは「ゴリーーの遊び場がある」と、弛んだ蔓に腰をかけ、楽しげに体を揺らす。	
	3	魔女とゴリーーの結婚 2月8日	森を探検中、コウキが「魔女とゴリーーって結婚したんよ」と話し始める。セイヤが「え！ほんと？」と驚いた様子を見せると、コウキは「ゴリーーは魔女の怖い顔が好きだから結婚した」「二人はずっと森の中で暮らしてるんだよ。だから昼はいなくて、夜になると二人とも出てくる」と語る。	
	4	ゴリーーの罨 2月16日	森を探検していると、シンジが蔓に足を取られ転倒する。シンジは体を起こすと「痛ったー」とはにかむ。「危なかった。ゴリーーの罨があった」「こんなところに罨があったら、みんな転んで危ない」と言い、木の棒を拾うと大袈裟に蔓を叩いてはにかむ。	
	5	そんなことしない 2月16日	森の探検を終えて園舎へ戻る際、シンジが「そこはゴリーーの罨があるから(気をつけて)」と言う。マリナは不機嫌な表情で「何でもゴリーーのせいにしないで。」「ゴリーーは、友達になろうって言ったんだから、悪くない」「ゴリーーは、そんなことしない」と、ゴリーーを擁護する。	
	6	ゴリーーのプレゼント 3月16日	卒園式前日、森の山頂広場を訪れると、木の枝に紐でシダの葉が結びつけてあることに幼児が気付く。ハルトは「ゴリーーがやったんだ。ゴリーーのプレゼントだ!」「ゴリーーが『年長組さん、卒園おめでとう』って付けてくれたんだ!」と大きな声で言う。	
b) 幼児を取り巻く現実と空想の世界を交錯させ、幼児が論理的に思考することを促す役割	7	ゴリーーがいた場所 11月18日	暗闇探検の翌日、前日にゴリーーと出会った場所を訪れる。シンヤは「やっぱりゴリーーがいない。今日は年中さんも年少さんもいるから、ゴリーーは恥ずかしくて出てこないんだ」と言う。マリナは「ゴリーーは太陽が嫌いだから、昼間は森の中にいてここまでは出てこないんだよ」と話す。	5
	8	大きな亀裂と茶色の苔 11月22日	森を歩いている最中、木の幹の表面に大きな亀裂を見つけ、マリナは「ゴリーーがやったんじゃない?」と話す。ショウタは、木の枝に付着した茶色の苔を指差し「ゴリーーの毛が付いてる!」「ゴリーーがさ、ここに来て、こうやって木で遊んだんじゃない?その時にさ、体が木に当たって、毛がついたんじゃない?」と身振りを交えて話す。	
	9	ゴリーーの毛じゃない 11月30日	NO.3にて、ショウタは茶色の苔を「ゴリーーの毛が付いてる!」と指摘した。約一週間後、ショウタは、茶色の苔を手で触ったり匂いをかいだりした後「これはゴリーーの毛じゃない。この匂いは、たぶん昔、ここが海に沈んだときの海藻だ」と話す。	
	10	ゴリーーの家族 12月2日	幼児らが森でゴリーー探しをする際、リクトは「大きいゴリーーは小さいゴリーーを守ってるから(いつも見つけられない)」と話す。ショウタは「暗闇探検のゴリーーは、思ったより小さかったから、子どものゴリーーだったのかも」と呟く。	
	11	黄色の粉末 1月20日	幼児らが焚き火をしていると、炉の石の上に黄色の粉末が落ちていることに気付く。ヒトシが「木のくずじゃない?」と言うが、カズマは「いや、ゴリーーがやったんだ。ゴリーーが何か食べた跡だ」「ゴリーーは木が好きだから」と呟く。ヒトシは黙って黄色の粉末を見つめて考え込み「違うと思う」と呟く。	
c) 幼児間に象徴的で具体的な共通したイメージを想起させる役割	12	ゴリーーみたいに 12月9日	セイヤは枝を折ろうとして両腕に力を込めるが、折ることができない。セイヤは保育者に頼む。保育者も枝を折ることができないでいると、セイヤは「ゴリーーみたいに力出して」と言う。コウキも「ゴリーーだったら一発だからね」と話す。	2
	13	登りたいアスレチック 12月16日	マイコは森でアスレチックに挑戦しているが、思うように体を持ち上げることができない。マイコはロープを見上げながら「ゴリーーだったら登れるのにな」と呟く。ヒカリも「ゴリーーだったら通り越して木の上まで行くよね」と笑顔で話す。	
d) 幼児が抱える不安を軽減させ安心感を抱かせる役割	14	森は薄暗いから行きたくない 11月30日	森の探検へ出掛ける際、マイコは「森は薄暗いから行きたくない。魔女が遊びにくるかもしれないから嫌」と話す。ハルトは、マイコに近寄ると「ゴリーーが守ってくれるから大丈夫だよ」と語りかける。	2
	15	でも大丈夫 12月7日	森でままごとをして遊んでいると、太陽が雲に隠れてあたりが薄暗くなる。マイコは「ちょっと怖いね」とアイカに話しかけた後、「ゴリーーが来るかも。でもゴリーーが守ってくれるから大丈夫だよ」と、不安げな表情で話す。	

させたと捉えられる。

## 事例2 「小さいゴーリー」

(事例 NO.1 11月19日)

マイコとアイカは、森にある自分たちの家として使用している場所で、落ち葉や木の枝を掃除し、ままごと遊びをする。マイコは木を見上げ「こんなの無かった」と、木に絡まった蔦を指差す。その言葉を聞いたアイカは「ほんとだ。無かったよね」と相槌を打つ。マイコは近くにいた保育者を呼び「こんなの無かったのに、今日は有る」と知らせる。保育者が「これまで無かったんだ」と答えると、マイコは蔦を差して「階段みたい」と表現する。続けてマイコは「小さいゴーリーがこの階段を登って上まで行くだ」と笑いながら話す。アイカは笑顔でその話を聞いている。マイコは「ゴーリーがトントンって登って、森の中に入って行ったのかなあ」と言う<sup>1)</sup>と、アイカは「ゴーリーがお家に来るかもしれないから、ここに『マイコちゃんとアイカのおうち』って看板つけたい」と提案する。

マイコは森で蔦の変化に気付いたことを、ゴーリーと結びつけた。下線部1のマイコの語りから、小さなゴーリーが蔦の階段を登って行く姿を想像し、自由に空想を展開していることが窺える。ままごと遊びをしているマイコらが唐突にゴーリーを持ち出して会話をしたのは、なぜだろうか。

暗闇探検まで、森のどこかにいるかもしれないという空想上の存在でしかなかったゴーリーであったが、実際に出会い友達の印を受け取った体験は、幼児にゴーリーを身近な存在として意識させることになった。マイコとアイカの家はゴーリーと出会った場所とは異なるが、蔦の変化に気付いたマイコがゴーリーを持ち出して会話をしたことから、森とゴーリーがマイコの中で強く関連付いており、森の自然環境に触れることでゴーリーの存在が想起させられているといえる。

本事例が収集された場所では、ままごと遊びがマイコとアイカによって日常的に行われ、二人の発想から遊びが進行する様子が見られていた。幼児の理解の外にある森の中の自然環境の有り様によって想起されたゴーリーが、ままごと遊びを楽しもうとするマイコの思いを投影させ、小さいゴーリーという自由な語りを作り出させたと捉えられる。

本事例以外にも、幼児らが森の自然環境で発見する様々なものに対して、ゴーリーと結びつけ、自由に語る場面が収集された。事例 NO.2

「ゴーリーの遊び場」では、遊びを探して森を訪れたリョウマが、木々に絡み付いて大きく弛んだ蔓を見て、その光景を「ゴーリーの遊び場」と称し、蔓をブランコに見立てて乗り楽しげに体を揺らす姿が捉えられた。また事例 NO.4 「ゴーリーの罌」では、森の地面に這う蔓に足を取られて転倒したシンジが、転倒の原因となった蔓を「ゴーリーの罌（ゴーリーが仕掛けた罌）」と語る場面が収集された。シンジが「ゴーリーの罌」という空想を生み出し、自身が転倒した原因を「ゴーリーのせい」にして、責任を転嫁するような事例であった。

以上のように、あくまで日常的には存在を確認できないゴーリーであるが、森の自然環境を通して存在が想起され、幼児らに自由に語りを作り出させていた。

### 【考察】

A 幼稚園の幼児は入園から卒園までの間、森で自由に遊び、他児と活動を共にして過ごす。幼児にとって、森は単なる自然環境ではなく、自分たちの生活の場として存在する。事例に見られるように、ゴーリーが提示されていない場面でも、唐突にゴーリーの空想が語られ始める。ミクリッツ<sup>10)</sup>が、自然空間は自律的な構造をもっているとし、幼児個々人の自由な解釈や意味の付与を可能にすると述べるように、森の自然環境のもつ性質が、幼児に自由な空想を促すのであろう。ゴーリーとの出会いを経験した幼児らは、その時点から、ある意味ではゴーリーと共に過ごしているような感覚を得ながら、自分なりの解釈や意味付けをしているのではないだろうか。

また暗闇探検で実際に出会いを経験したとはいえ、それ以降に幼児らがゴーリーに出会うことはない。保育者も暗闇探検以降、意図的にゴーリーを扱うことはしておらず、幼児にとってゴーリーはあくまで未知で不思議な、森にいる空想上の存在としてあり続けている。そのため、森の自然環境に触れることでゴーリーを想起した幼児には自由な語りが生まれる。そして生み出される語りには、幼児の実生活で起こる心情が投影される。実際に出会いを経験することにより、ゴーリーは単なる空想上の存在ではなく、幼児の実生活に寄り添う存在となり、幼児の思いを投影させて語りを作り出させる役割があると考えられる。

b) 幼児を取り巻く現実と空想の世界を交錯させ、幼児が論理的に思考することを促す役割

### 【事例と解釈】

#### 事例3 「ゴリーがいた場所」

(事例NO.7 11月18日)

暗闇探検の翌日、トシヤ、シンヤ、マリナは、前日にゴリーと出会った場所を訪れる。トシヤは周囲を見渡し「ゴリーいない」と呟く。トシヤはしゃがみ込んで木の根本を指差し「ここに木があったはずなのに無くなった」「ここには何も無かったのに、チクチク（栗のイガ）がいっぱいある」などと言いながら、昨夜ゴリーがいた場所を確認して歩く。シンヤは「やっぱりゴリーがいない。今日は年中さんも年少さんもいる（前日は5歳児クラスのみ登園）から、ゴリーは恥ずかしくて出てこないんだ」と言う<sup>1</sup>。トシヤも「そうだね。ゴリーは恥ずかしいんだよね」と頷く。近くにいたマリナは「ゴリーは太陽が嫌いだから、昼間は森の中にいてここまでは出てこないんだよ」と話す<sup>2</sup>。トシヤは「そうだよね」と同意する。

トシヤらは、前日に行われた暗闇探検で出会ったゴリーの存在を確かめようと森を訪れたが、ゴリーの姿を発見できず、その理由を推論し始めた（下線部1, 2）。シンヤは他年齢児が登園していることで、姿を見られる恥ずかしさからゴリーが現れないと解釈し、マリナはゴリーが太陽を嫌うために昼間は現れないという見解を示した。これらの解釈は「a）幼児の思いが投影させられ、自由に語りを作り出させる役割」のように自由に語りを作り出させたものではない。ゴリーは幼児に「再開したい」という思いを引き起こさせ、ゴリーが恥ずかしがる姿や太陽を嫌がる姿を空想しながら自分を取り巻く現実世界の道理と照らし合わせ、論理的に思考することを促したといえる。

#### 事例4 「大きな亀裂と茶色の苔」

(事例NO.8 11月22日)

探検へ出かけて森を歩いている最中、木の幹の表面に大きな亀裂を見つけたマリナは「ここ、木が傷ついてる」と言う。「どれ？」と数人の幼児らが集まる。「ほんとだ」「ふーん」などと言いながら幼児らが亀裂を見ている中、ショウタが「どうして？」と呟く。するとマリナは「ゴリーがやったんじゃない？」と話す<sup>1</sup>。ショウタは、黙って考える。再び森を歩いていると、ショウタが「ねえ！見て！」と叫ぶ。ショウタは、木の枝に茶色の苔が付着している部分を指差し「ゴリーの毛が付いてる！」と興奮した様子で話す<sup>2</sup>。「どれ？」と幼児らが集まる。シ

ウタは続けて「ゴリーがさ、ここに来て、こうやって木で遊んだんじゃない？その時にさ、体が木に当たって、毛がついたんじゃない？」と身振りを交えて話す<sup>3</sup>。セイヤが「そうかもね！」と同意する。ショウタは「ちょっとあっちも見てみよう」と、森の奥へ進む。

下線部1で、木の幹にできた亀裂を見たマリナの「ゴリーがやったんじゃない？」という発言をきっかけに、幼児らは空想の世界に足を踏み入れた。マリナは木に亀裂ができた理由をゴリーと関連付け、ショウタもマリナの発言に触発され、その後に発見した茶色の苔に対して「ゴリーの毛が付いてる！」（下線部2）と指摘し、自身の解釈について身振りを交えて具体的に他児に伝える様子が捉えられた（下線部3）。ショウタは空想の中でゴリーの短い物語を作り上げており、ゴリーの毛と思われるものが付着した根拠を論理的に語った。ゴリーの存在が、目の前の森の自然環境をきっかけに空想の世界へと誘い、現実の世界と交錯させながら思考することを促していた。

ショウタの論理的な思考は、約1週間後の事例5「ゴリーの毛じゃない」においても継続的に展開された。

#### 事例5 「ゴリーの毛じゃない」

(事例NO.9 11月30日)

事例4「大きな亀裂と茶色の苔」にて、ショウタは茶色の苔のようなものを見つけ「ゴリーの毛が付いてる！」と指摘した。約一週間後、森の中で同じものを見つけたショウタは、茶色の苔のようなものを手で触ったり匂いをかいだりした後「これはゴリーの毛じゃない。この匂いは、たぶん昔、ここが海に沈んだときの海藻だ」と話す<sup>1</sup>。

事例4「大きな亀裂と茶色の苔」では、森で発見した茶色の苔をゴリーの毛と結論付けたショウタであったが、本事例では異なる論理を展開した。苔のようなものの感触や匂いを確かめ、事例4で展開させた自身の結論を否定し、新たな答えを導き出した。下線部1のショウタの論理では、これまでの実体験や知識から「海に沈んでいた森」という空想が生み出されており、自分を取り巻く世界の構造を考えるに至った。このようにゴリーは幼児に現実と空想の世界を交錯させ、論理的に思考することを促す。

### 【考察】

事例4「大きな亀裂と茶色の苔」にある下線部1のマリナのように、森で起こる現象をゴ

リーと紐付けてその原因を論理的に思考する様子は、事例 NO.11「黄色の粉末」でも見られた。焚き火の炉に鮮やかな黄色の粉末が落ちていることに気付いたカズマらは、黄色の粉末の正体を考える。「木のくず」と主張するヒトシに反して、カズマは「ゴリーが何か食べた跡だ」と主張する。カズマは「ゴリーは木が好きだから」と根拠を述べており、この発言はヒトシの「木のくず」という発言を受けて空想されたものと考えられた。ヒトシはカズマの発言を「違う（ゴリーが食べた跡ではない）と思う」と否定しながらも、カズマの解釈を聞き、再び考え込む様子が見られた。

幼児にとって、暗闇探検の出来事は非日常的な空想世界に足を踏み入れた体験であった。そのような非日常的な体験をもたらしたゴリーは、幼児の印象に強く残り、日常的に森で出会う様々な自然物や自然現象に触れることで思い起こされ、ゴリーとの再会を望んだり、その生態を解明しようとしたりしながら、論理的に思考する機会をもたらした。

事例 3, 4, 5 に登場した幼児らは、森にゴリーが存在するという考えのもと空想のゴリーを扱っている。一方で、事例 NO.11「黄色の粉末」に登場したヒトシは、事例外で「ゴリーは人が中に入っているんだ」と指摘し、ゴリーの存在に疑惑を抱いていた。ヒトシのようにゴリーの存在に否定的であっても、事例 NO.11では他児と共にゴリーを扱う話題に参加し、論理的に思考する場面が捉えられた。

富田<sup>11)</sup> は、想像的探検遊びにおいて、空想上の存在の実現可能性について「うそ？」という疑いと「ほんと？」という信じ込みとの境目で認識が揺れ動き、その揺らぎを動機付けとして探索や探究を繰り返すと述べている。事例 3 のようにゴリーの実在性に迫ろうと探索する幼児の姿もあるが、空想上の存在はそれだけでなく、幼児に自分を取り巻く現実世界についても思考することを促していた。

ゴリーは、幼児にとって実際の出会いを経て、単に実在性の探究を促すだけではなく、園生活の中でゴリーについてあれこれと思いを馳せながら空想を引き立てることを促し、自分の経験や知識から論理的に思考することを促すのだろう。

c) 幼児間に象徴的で具体的な共通したイメージを想起させる役割

#### 【事例と解釈】

事例 6 「ゴリーみたいに」

(事例 NO.12 12月9日)

セイヤは、森で拾った枝を折ろうとして、両腕に力を込めるが折ることができない。近くにいるコウキに手伝いを頼むが、枝を折ることはできない。セイヤとコウキは枝を持って保育者のもとへやってくると「先生、この木(枝)折って」と頼む。保育者が力を込めて折ろうとするが、枝は簡単には折れない。するとセイヤは「ゴリーみたいに力出して」と言う。コウキも「ゴリーだったら一発だからね」と話す<sup>1)</sup>。

下線部 1 のセイヤとコウキの発言から、彼らはゴリーを、「強い力の持ち主」の象徴として捉えていることがわかる。二人にこのような共通したイメージが想起されたのはなぜだろうか。

彼らにとってのゴリーは、空想上での森にいる存在に、実体としてのゴリーが加わり、より具体的な形やイメージをもつ存在となったと考えられる。またゴリーとの出会いは、一人ずつで出会うという個人体験であるが、クラス全員がゴリーとの出会いを果たすことから「私たちのゴリー」という感覚が幼児の中に芽生えたと考えられる。出会いを経て形作られたイメージに「私たちのゴリー」という概念が加わり、幼児に共通のイメージを想起させるのだろう。

事例 7 「登りたいアスレチック」

(事例 NO.13 12月16日)

マイコとヒカりは、木々の間にロープを渡して作成されたアスレチックに挑戦している。ヒカりは、器用にアスレチックを上る。しかしマイコは、思うように体を持ち上げることができない。何度か挑戦した後、やっと1段目のロープに上ることができる。さらに上段にもロープが掛けられているが、マイコは手を伸ばすことなく地面に降りる。ロープを見上げながら「ゴリーだったら登れるのにな」と呟くマイコ<sup>1)</sup>。その言葉に対してヒカリも「ゴリーだったら通り越して木の上まで行くよね」と笑顔で話す<sup>2)</sup>。続けてマイコは「ゴリーは空まで飛んでくかも」と笑う。

事例 6 「ゴリーみたいに」では、強い力の持ち主の象徴として捉えられていたゴリーであったが、本事例では木登りの名手として扱われている。マイコが挑戦をやめる姿から、アス

レチックに登れないことの悔しさや歯痒さを感じ、その心情は「ゴリーだったら登れるのにな」という発言(下線部1)となって表れたと読み取れる。一方ヒカリは、マイコの眩きから瞬時に木登りをするゴリー像が想起され、ゴリーの存在を介して「巧に木を登る」という具体的なイメージが共有された(下線部2)。

#### 【考察】

事例6と事例7では、幼児はゴリーを特別な能力を持つ象徴的な存在として用いていた。それは、「a) 幼児の思いが投影させられ、自由に語りを作り出させる役割」や「b) 幼児を取り巻く現実と空想の世界を交錯させ、幼児が論理的に思考することを促す役割」において、ゴリーの存在が幼児に空想を促し自由な語りを作り出させたり、ゴリーの実在性を探究して論理的な思考を促したりすることとは異なり、活動の中で象徴として現れ、比喩的な表現として用いられた。幼児の集団性と象徴性の発達を検討した森<sup>12)</sup>は、幼児の遊びは見立て遊びや空想遊びなどの「象徴遊び」が中心であり、それらは高い象徴性を含むとし、幼児の見立て能力において、発想力および集団性について年齢別に2×2の分散分析を行った。その結果、4歳児には主効果、交互作用はみられなかったが、5歳児において集団性の主効果がみられ、下位検定の結果、集団性高群が集団性低群よりも見立て能力が有意に高いという結果が得られたと述べる。この結果から、幼児が他児と行う象徴遊びにおいて、現実から想像の世界へ飛躍するために象徴能力が発揮され、それが発達することが示されているが、本事例では象徴遊びに限らず、象徴遊び以外の場面においても空想上の存在が象徴的なイメージとして形成され、扱われていることが捉えられた。

実際の出会いを経て形成されたゴリーのイメージと、全員が出会うことによって生まれた「私たちのゴリー」という感覚によって、ゴリーは幼児の園生活の中で象徴として存在し、幼児間に具体的に共通したイメージを想起させる役割をもつと考えられる。

d) 幼児が抱える不安を軽減させ安心感を抱かせる役割

#### 【事例と解釈】

事例8「森は薄暗いから行きたくない」

(事例NO.14 11月30日)

クラス全員で森の探検へ出掛けることになった際、マイコは「探検へ行きたくない」と保育

者に話しかける。保育者が、マイコに森へ出掛けたくない理由を尋ねると、マイコは「森は薄暗いから行きたくない。魔女が遊びにくるかもしれないから嫌」と話す。保育者がマイコに「皆で行くから大丈夫だよ」と声をかけるが、マイコは納得しない様子でうつむく。その姿を近くで見ていたハルトは、マイコに近寄ると「ゴリーが守ってくれるから大丈夫だよ」と語りかけて手をつなぐ<sup>1)</sup>。マイコの表情は曇ったままだが、ハルトに手を引かれて歩き始める。

下線部1のハルトの発言から、ゴリーは自分たちを守ってくれる存在と捉えていることがわかる。しかし暗闇探検は暗い夜の森で行われ、ゴリーは幼児が訪れるまで唸り声をあげていたため、多くの幼児が出会いの場面で涙を流して恐怖を感じていた。ゴリーとの出会いはこのような衝撃的な恐怖体験であったにもかかわらず、ゴリーは幼児らに安心感を抱かせる存在として扱われている。

大野<sup>13)</sup>によれば、恐怖の対象であったゴリーがポジティブなイメージへと変換されるのは「幼児にとって異界ともいえる『くらやみ』と、安全な『幼稚園』との往還の中で、目や歯を光らせる恐いけれども、幼稚園を守ってくれる優しい存在へと都合よくゴリーの物語を変容させている」ことによる。恐怖感情を乗り越えた先で友達になった経験が土台となり、幼児らが園生活の中でゴリー像を安心感へと変換させ、ゴリーは幼児に不安を軽減させ安心感を抱かせる存在になると考えられる。

事例9「でも大丈夫」(事例NO.15 12月7日)

マイコはアイカ、ヨウコと一緒に森でまごとして遊んでいる。料理の材料にするために木の実や朽木を探していると、それまで出ていた太陽が雲に隠れ、あたりが薄暗くなる。ヨウコは「わあ!夜になった」と笑う。地面に落ちている木の実を拾っていたマイコは、顔を上げると「ほんとだ」とあたりを見渡す。マイコは「ちょっと怖いね」とアイカに話しかける。アイカは「大丈夫だよ。ちょっと暗くなっただけ」と返答する。マイコは「ゴリーが来るかも<sup>1)</sup>。でもゴリーが守ってくれるから大丈夫だよ」と、不安げな表情で話す<sup>2)</sup>。アイカが「マイコちゃん、ドングリあったよ」と声をかけると、マイコは「ありがと」と言って再び木の実を集め出し、まご遊びを続ける。

マイコは、日が陰り薄暗くなった状況に対して「ちょっと怖いね」と不安げな様子を見せている。事例8「森は薄暗いから行きたくない」

で見られたマイコの様子も含め、森で過ごすことにいくらかの不安感をもっていることが窺える。また下線部1の「ゴーリーが来るかも」という発言から、マイコにとって森の薄暗さがゴーリーの存在を呼び起こさせていると読み取れ、不安とゴーリーが結びついていることがわかる。しかし同時に「でもゴーリーが守ってくれるから大丈夫だよ」(下線部2)と、ゴーリーはマイコの中で安心感を与える存在としても同居している。ゴーリーと対面し友達の印を受け取った体験や、他児がゴーリーを守護する存在と認識する発言を聞くことによって、マイコはゴーリーに対して不安を感じながらも一定の安心感を抱いていると考えられる。

#### 【考察】

森の環境には不快、不足、不潔、不便、不安の4つの「不」が存在し、森における保育では、負の体験、不の体験が多く含まれるという特徴があるとされる<sup>14)</sup>。森の不便さが必要なものを作り出すこと、不足感から工夫することを促すなど、幼児に多様な感情体験をもたらす。しかし一方で、マイコが森の薄暗さを不快と感じているように、そのような「不」の環境によって、森は足を踏み入れることを躊躇する場となることもある。そのような場面では、幼児は安心感の得られる存在としてのゴーリー像を創り上げ、不安を軽減させていた。ゴーリーは、幼児が森に抱える不安を軽減させ安心感を抱かせる役割をもつといえる。

#### IV 結 語

本稿では、森にいる空想上の存在であるゴーリーと対面を果たした後、幼児が園生活で空想上の存在をどのように扱っているのかを検討した。その結果、森にいる空想上の存在が幼児に果たす役割が4つに分類された。ゴーリーは幼児に対してa) 幼児の思いが投影させられ、自由に語りを作り出させる役割、b) 幼児を取り巻く現実と空想の世界を交錯させ、幼児が論理的に思考することを促す役割、c) 幼児間に象徴的で具体的な共通したイメージを想起させる役割、d) 幼児が抱える不安を軽減させ安心感を抱かせる役割を果たすことが示された。

ゴーリーという空想上の存在は、森で過ごす幼児がその存在を自由に扱うことを受容し、幼児の空想や思考を促していた。「ゴーリーだったら……」「ゴーリーみたいに……」という空想は、ゴーリーに思いを馳せる幼児が、自身と

ゴーリーの二つの視点から、自身を取り巻く世界を捉えようとするものと解釈できる。一般的に、幼児は現実世界と空想世界を自由に行き来するとされるが、現実世界の出来事をゴーリーの視点からも捉えようとする様は、現実世界と空想世界をより重層的に往還しているとも言える。

保育実践において幼児の空想が取り上げられる際、空想によって展開される想像的探検遊びや象徴遊びといった活動の中に、教育的な意味が求められてきた。本稿で捉えられた幼児の姿や明らかになった役割から、森にいる空想上の存在は、暗闇探検における保育者の教育的な意図を超えて、森で過ごす幼児の傍らに寄り添うように共にあり、幼児の園生活を支え続けていると考えられる。

本稿では、ゴーリーと対面を果たした後の幼児の姿から、森にいる空想上の存在が幼児に果たす役割を検討したが、対面以前の幼児が森にいる空想上の存在を扱う場面は検討していない。ゴーリーとの対面前後において、森にいる空想上の存在が幼児に果たす役割が変化することが予想されるが、観察期間上、役割が変化する過程を示すには至らなかった。幼児がゴーリーとの対面前後において森にいる空想上の存在を扱う場面を比較検討することで、幼児が現実世界と空想世界を重層的に往還する様相を詳細に捉えることができるだろう。

#### 注

- 1) お泊まり保育とは、幼稚園や保育所、幼保連携型認定子ども園等で行われる行事の一つであり、子どもが親元から離れて園内や園外の施設を利用し、宿泊を伴って行われる保育を指す。本研究が対象としたA幼稚園では、例年園内でお泊まり保育が行われるが、観察期間とした2021年は、新型コロナウイルス感染症拡大予防下であったため、11月17日に宿泊を伴わずに暗闇探検等の活動が行われた。

#### 引用文献

- 1) 藤野友紀(2008)遊びの心理学：幼児期の保育課題. 石黒広昭(編). 保育心理学の基底. 萌文書林. 116-148
- 2) 富田昌平(2015)幼児期における空想世界に対する認識の発達. 博士論文. 兵庫教育大学. 兵庫. 17

- 3) 河崎道夫 (1987) 仲間と眺め, 心躍る世界に:探検遊びの実践を読む. ひとなる書房. 185-212
- 4) 大野歩・真鍋健・花岡祈一郎・七木田敦 (2010) 幼稚園における非日常的な体験とその意味について—幼児たちはどのようにゴリーと出会うか—. 保育学研究48(1). 47-57
- 5) 森下英美子・中山智晴 (2010) 幼児向環境教育「森のムッレ教室」が参加者に与えた影響. 文京学院大学人間学部研究紀要12. 11-20
- 6) 岩附啓子・河崎道夫 (1987) エルマーになった子どもたち. ひとなる書房. 12-34
- 7) 斎藤桂子・河崎道夫 (1991) ボクらはへなそうる探検隊. ひとなる書房. 17-93
- 8) 前掲2. 17-18
- 9) 前掲4. 47-57
- 10) イングリッド・ミクリッツ (2016) 森の幼稚園—ドイツに学ぶ森と自然が育む教育と実務の指南書. 風鳴社. 37-46
- 11) 前掲2. 17
- 12) 森林・石橋尚子 (1992) 幼児の集団性と象徴性の発達の検討. 日本教育社会学会大会発表要旨集録. 12-13
- 13) 前掲4. 47-57
- 14) 松本信吾 (2018) 身近な自然を活かした保育実践とカリキュラム—環境・人とつながって育つ子どもたち—. 中央法規32-33